

平家物語の敬語表現：敬語・曲節・人物批判

奥村，三雄

<https://doi.org/10.15017/2332682>

出版情報：文學研究. 78, pp.1-21, 1981-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

平家物語の敬語表現

— 敬語・曲節・人物批判

奥村三雄

一 はじめに

〔1〕 もともと本稿は、『文学研究』76集・『論集国語学』（昭55桜楓社）・『平曲譜本の研究』（昭56桜楓社）第一・三編の拙稿等に次いで、 \triangle 語り物という観点から一流平家物語諸本の詞章差を説明しようとする ∇ 研究の一環である。ただ敬語表現という問題の性格上、平曲音楽との直接的なかわり合いなどよりも、もっと重視すべき要因がいろいろありそうだが、しかしまた、そこに何らかの意味での語り物的特性が窺える事も確かである。

例えばそこには、下記第五章の如く \triangle 身分本位の敬語から人物本位へ ∇ という傾向性が認められるが、これはどの作品にでも常に認められる現象というわけではなく、必ずしも敬語史の一般的方向とは言えない。やはり \triangle 語り手が、（聞き手との関係も含めて）各登場人物の待遇表現を特に気にしなければならない ∇ という語り物的特性の反映と見られる。現に覚一本以下一流諸本における敬語の異同率は地文の例が著しく、会話文の例の三倍にも及ぶ（特に覚一本 \rightarrow 葉子本における尊敬語の異同率は、地文の例が会話文のその六倍を数える）が、この事も右記の考え方を支持する。つまり語り物における地文の敬語異同は、読むだけの文献の場合と異り、語り手が登場人物それぞれに対する待遇度を気にせね

ばならなかった結果と考えられるのである。なお対話連続の多い戯曲的な覚一本に対し、葉子本以下諸本ではト書きを挿んだ語的文体への推移が見られるが、この事もやはり会話より地文の敬語増加が著しい事と関係しそうである。

〔2〕 一方流諸本の敬語については、従来、岡村和江氏「平家物語流布本の敬語表現」(『実践女子大紀要』5)・「平家物語の敬語法」(『講座解釈と文法』5)、西田直敏氏「平家物語における敬語法」(『国文学』11の8)、篠田融氏「平家物語における敬語」(『国文学』5の20)等々、かなりの論考があるが、しかし、本稿の如き観点からする詳しい研究は未だしの感があった。ここに平曲譜本類を含む一方流諸本の敬語表現を考察しようとした所以である。

二、一方流諸本の敬語異同

先ず一方流諸本における敬語表現の異同を概括すると次の如くである。

(A) 曲節との関係からすれば、詞章異同一般とほぼ同様、白声・口説など音楽性の薄い曲節に敬語異同が著しく、歌の類や三重・中音・初重・折声など音楽性の著しい曲節にそれが少い。下ケ類など比較的新しい頃に旋律の固定した曲節では、しばしばその関係による異同が見られるが、ここでは一般に語形の慣用句化傾向がめだつ様である。

(B) 覚一本・葉子本・時房本・流布本・平家正節の五本を比較対照させた場合、〔覚／葉時流正〕の対立及び〔覚葉／時流正〕の対立が圧倒的に多いが、右記五本を成立順に並べて比較した場合は、〔葉／時〕の差が最も著しい。

(C) 一般的には敬語の増加傾向が著しく、特に時房本以前では増加例が減少例の三倍位認められる。しかし時房本以降では、増加例が減少例よりやや多い程度である。

語形別の異同は複雑だが、一般的には「ル・ラル」、次いで「給フ」の異同が多く、高い敬語の異同は少い。特に

時房本あたり以降ではそれが稀である。

(D) 敬語の増加率は人物によって異なる。中にはむしろ減少傾向のめだつ人もあり、また場面により増減差の著しい人物もある。一般的に増加率は身分の低い人に多く、同じ武士でも平氏の増加は源氏のそれ程著しくない様だが、忠盛の如き例外もある。そこには或意味で身分本位の敬語から人物本位の敬語へという様な動きが認められよう。即ち、各本を編纂監修した検校やその背後の聞手達に関する人物批判・行動批判の態度がうかがえそうなのである。

以下、これらの一々につき考察を試みよう。

三、音楽性との関係

〔1〕 先ず右記(A)の問題―前に「待遇表現の異同は音楽性とのかわり合いよりも、その他の諸要因が重要」と述べたが、しかしそれはあくまで相対的な論である。右記(A)の如き事実いずれも、詞章異同一般の場合(『文学研究』76集拙稿)と大同小異だという様な意味もあり、敢えて消極的な言い方をしたわけだが、ともあれ敬語異同に関する、曲節の種類との間にはっきりした法則性が認められる事は確かである。

〔2〕 さし当り下記十五章段(㊦を参照)における敬語異同率(異同数を本文詞章の行数で除したパーセンテージ)を、曲節別に示すと次の如くである。

口説	16.9	下ケ類	13.2	白声	12.2	指声	12.2	初重類	11.1	中音類	6.1	強声	5.7	三重類	3.7	拾	2.2	折声	0	歌類	0
----	------	-----	------	----	------	----	------	-----	------	-----	-----	----	-----	-----	-----	---	-----	----	---	----	---

㊦ ここにとり上げた十五章段は次の如くである。「殿上闇討・鱧・禿・我身栄花・妓王・二代后・清水炎上・殿下乗合・鹿谷

・小教訓・源氏揃・伊豆院宣・北国下向・木曾願書・河原合戦

言うまでもなく寛一本巻一の各章段を中心とするが、その他の巻からも適宜六章段をぬき出した。巻一が平氏中心の記述である故、他の巻はなるべく源氏の記述を中心とする様にした。また平家正節における平物の他、読物(よみもの)(木曾願書・伊豆院宣)・炎上物(も)(清水炎上)・揃物(そろいもの)(源氏揃)の類からもとり上げる様にした。

※その他、曲節の分類や異同例の数え方など、すべて『文学研究』76集の場合に準ずる。ただしとり上げた章段は必ずしも同一でない。

〔2.1〕参考の為、前稿で示した本文詞章一般の異同率を示すと次の如くである。

白声 101 口説 99 下ケ類 90 折声 45 初重類 28 中音類 22 三重類 27 歌類 0

〔3〕『文学研究』76集の前稿で表示を省いた指声・拾・強声などは別として、折声や下ケ類・白声など彼我の異同率に多少の差は認められるが、何れにしても、白声・口説や下ケ類に異同が多く、歌類や三重・中音・初重類、折声などに、異同が少い点はほぼ同様である。

〔3.1〕なお折声の敬語異同率0は、十五章段に限った為の現象かと思われるが、範囲を広げてみても異同例が非常に少い事は確かな様である。

〔3.2〕調査範囲の問題に関連して更に言えば、右記十五章段に限っては三重も異同率0とすべきなのかもしれない。ここで敬語異同としてとり上げた左記「鹿谷」の例も、或いは流布本の誤記かとも思われるからである。そう言えばこの語句は他に二例(教訓状・腰越)認められるが、諸本いずれも「給はず」「給ふべからず」となっているし、その他でも一般に神に関する敬語を省いた例は皆無である。特に敬語増加傾向の著しい流布本において神の敬語を削るといふ様な事は、ちよっと考え難いのである。

神は非礼をうけ給はず(覚葉時正) ↓×(流)〔鹿谷・上122 10・717 d〕

④ 本稿における詞章異同の示し方等は、すべて『文学研究』76集の拙稿に準ずる。

※さし当り右記の例は、覚(覚一本)・葉(葉子本)・時(時房本)・正(平家正節)の諸本で「神は非礼をうけ給はず」とある部分が、流(流布本)では「神を非礼をうけず」となるわけである。

※これに対し、下記(〔5.1項〕)「お尋ねあり(覚)―仰せければ(葉時流正)」とあるのは、次の事を示す。―覚一本で「お尋ねあり」とある部分が、葉時流正の諸本では「仰せければ」となっている。

※即ち、↓印は波線部分のみの異同を示し、―印はその詞章全体の異同を示す。

また×印は詞章が欠けている(他の本に存する詞章が)事を示す。

※用例は原則として平家正節尾崎家本(大学堂書店影印本)の頁数及び覚一本(岩波大系本)の頁数を示す。〔17d〕等とあるのがその前者、〔上12210〕等とあるのがその後者である。

〔4〕ともあれ右記の如き敬語異同率は、調査範囲の問題がいろいろとつきまとうわけだが、しかし大体の方向は動かないはずである。そういう意味で右記(〔3.2項〕)折声の異同率が非常に少ない事は、拾の異同例が少く、下ケ類の異同率が白声のそれより多い事などと共に、敬語異同の特徴(詞章異同一般の場合と異なる)かとも思われる。

〔4.1〕この場合、拾については、異同率というより敬語例自体が多くない事、折声についてはその例が大てい会話文である事などが考え合わされるが、その辺詳しくは今後にまらしたい。

〔5〕さし当り右記下ケ類と白声の關係について言えば、△同じく詞章異同の多い曲節でも白声や口説の類と下ケ類とでは事情を異にする。『文学研究』76集前稿の如くである。即ち白声や口説の場合は、音楽性が薄い為、音楽性に支えられた伝承の保守性という様な事に欠ける面があったと見られるが、下ケ類の場合はそれと異なり、旋律が覚一本の頃以降(おそらくは葉子本成立期の前後)に固定した為、その關係で詞章が揺れたものと考えられる。そういう意味もあって、下ケ類では、白声や口説の例の如き大巾な詞章異同が認められないが、敬語辞という様な部分的異同は、白声・口説の類に劣らず(或いはそれ以上に)多かったのだろう。

〔5.1〕 そう言えば下ケ類における敬語異同は左記②⑥の如く類型的な例が多く、いわゆる固定的旋律との関係を思わせる。

② お尋ねあり(覚) | 仰せければ(葉時流正) 〔鱸・上 89 9・24 c 下ケ〕 〔月見上 339 13・46 b 下ケ〕

⑥ お尋ねあれば(覚葉) | 仰せければ(時流正) 〔青山・下 108 6・129 d 下ケ〕 〔大原入・下 428 9・130。長下ケ〕 〔大原御幸・下 433 10・131 c 下ケ〕

覚一本の「お尋ねあり」十六例の中、七例が正節で「仰せければ」になっているが、その六例が何れも右記の如き下ケ類であり、すべて「おほせければ」の様な譜記をとっている。偶然とは見なし難いものがあるのである。なお残りの一例は指声であるが下記(〔6項])の如く、これについても或程度下ケ類と同様の事が言えそうである。

下ケ類の固定旋律と言えば、平家正節の例「仰せければ||ウァヰウ」×」(敵島還御・上 275 9・39 b 下ケ) (同・上 276 4・40 下 c ケ)などは、覚一本以下諸本いずれも同文であるが、正節の譜記自体は前記諸例のそれと全く同様であり、一おう前記諸例の詞章変化が固定的旋律にひきつけられたものである事を傍証する。

〔11〕⁵ その他、左記の例②⑥などについても、やはり下ケや強り下ケの固定旋律にひかれた敬語異同という事が考えられる。

② 陳じ申しける(覚)・上 89 9) ↓され(葉時流) | 陳じ申されける 〔殿上聞討・正 94 b 下ケ〕
⑥ 鎮められ(覚・上 113 10) ↓申さ(葉時流) | しづめ申され 〔清水寺炎上・正 1234 d 強り下ケ〕

右記⑥は強り下ケの例だが、覚一本の詞章ではその固定的旋律に困る。例えば「られ」とすると、「られ」のアクセントに矛盾するのである。即ち平曲資料当時「られ」のアクセントは●○型だったらしいが、「カケ」の譜記は下降調旋律を示すと見られる。『平家正節の研究』(昭55桜楓社)の拙稿その他を参照の事。

〔5.2〕 また前記〔5.1〕〔11.5.1〕諸例の如く、下ケ類の異同は、その多くが覚一本と葉子本、または葉子本と時房本の間の変化と見られるが、この事もやはり旋律の影響である事を思わせる。下ケ類の旋律が室町期半ば頃以降―恐らくは葉子本成立の頃―に固定したらしい事は、既に渥美かをる氏（『講座解釈と文法(5)』）その他の指摘された所である。

〔6〕 近代的曲節と言えば、指声についても或程度下ケ類の場合と同様の事が言えそうである。前稿では指声の詞章異同率を示さなかったが、当面、敬語については前記の如く白声に匹敵する位の異同率を示すが、その異同例は、大てい左記⑥の如く葉子本と時房本の間の変化と見られる。

⑥ 仕ふ（覚）―仕へむ（葉）―仕へ奉れ（時流正）〔殿上闇討・上85 1・89 b 指〕

⑥ 申したり（覚葉）↓され（時流正）〔鱸・上88 10・24 c 指〕

〔6.1〕 而して指声節は概ね他曲節の部分のつなぎ的役割を果す場合が多く、その流麗な旋律はやはり近代的なものに見られる。金田一春彦氏（『平家物語講座(2)』『日本文学研究』31）等参照の事。即ち指声の場合もやはり下ケ類の場合に準じ、旋律固定化の時期が遅かった為、覚一本以降の詞章変化が著しかったと考えられる。

前記〔5.1項〕「お尋ねあり（覚）と仰せければ（正）」の対応例七例の中、六例が下ケ類所属、一例が指声所属である事等も思い合わすべきだろう。

四、一方流諸本の性格と敬語異同

〔1〕 次に前記(B)の問題―これも概ね詞章異同一般の場合と大同小異であるが、唯この場合、葉子本と時房本の差が覚一本と葉子本の差より著しいという事は、左記富倉徳次郎氏説に矛盾するものとして注目をひく。いわく「覚一本と葉子本時房本との詞章流動に比し、葉子本・時房本相互の流動は極めて少い」（『平家物語研究』406頁）

〔2〕 この場合、本文詞章差一般について富倉氏説の如き事が言えるとするれば、葉子本と時房本の異同の著しきは敬語表現に限った現象という事になるわけだが、そういう意味では左記④⑤の事実など特に注目すべきだろう。

④ 葉子本と時房本の敬語異同は特に増加例がめだつ——葉子本と時房本の敬語異同は、増加例が減少例の4.4倍位あるが、覚一本と葉子本のそれは約1.8倍、時房本と流布本、流布本と正節のそれはほぼ1.1倍位という状態である。

⑤ 人物により葉子本と時房本の敬語差が著しい人や覚一本と葉子本の敬語差の著しい人等がある。——例えば清盛等は覚一本と葉子本の敬語増加がめだち、忠盛・文覚等は葉子本と時房本の増加が著しい。

〔3〕 しかしそれはそれとして、私の調査によれば詞章異同一般についても、やはり葉子本と時房本の差は覚一本と葉子本の差にまさるとも劣らぬものがある。勿論、詞章異同率という様なものは、調査範囲や異同例の数え方などにより或程度揺れるが、何れにせよ、前記「葉子本と時房本との詞章流動が極めて少い」というのは疑問である。何か富倉氏に感違いがあつたのだろう。本文詞章一般（敬語表現と限らぬ）の異同に関する詳細は、『平曲譜本の研究』（昭56桜楓社）第一編の第六章等に譲るが、葉子本の詞章と時房本との差が覚一本との差より著しい事は動かないはずである。

〔3.1〕 章段のたて方や各章段の記事内容等については左記の如く、葉子本と覚一本の差が時房本との差より遙かに著しい故、文献の性格全体としては葉子本と覚一本の差を重視すべきかと思われる。右記富倉氏説には、その辺の事情が先入観として働いたのかもしれない。しかし、敬語表現等部分的な詞章の動きはそれとやや事情が異なるわけがある。

左記⑥⑦⑧はいずれも覚一本の記事の中、他の一方流諸本で殆んど認められないものの例である。

⑥ 卷二「大納言流罪」中の「美濃知行葛」、⑦ 卷四「還御」中の「邦綱と内侍」、⑧ 卷五「富士川」中の「新院殿島願文」、⑨ 卷十一「能登殿最期」中の「越中次郎兵衛逃亡」、⑩ 卷十二「判官都落」中の「範頼被誅」……

〔11〕 これに対し、覚一本と葉子本の共通性としては、左記①～③の如きがあげられるが、量的に見て右記〔3.1〕

項) 覚一本の特異性には到底及ばない。

① 卷十一に「剣」の章段をおく事、② 卷六「祇園女御」中の「邦綱沙汰」の記事、③ 卷十一に「鏡」の章段をおく事、④ 卷七「北国下向」中の「大将軍六人」という記述、⑤ 卷十二「六代被斬」中の「断絶平家の記事」……

右記の中①～③の諸例は覚一本・葉子本のほか妙観派の康豊本とも共通であるが、この事から直ちに「葉子本を妙観派と見る」立場(富倉氏前掲書)に同意するのははばかられる。一おう①～③を通じて古い本と新しい本の対立と見なしておくのが穏当な所だろう。

五、身分の敬語から人物本位の敬語へ

〔1〕 前記(C)及び(D)の問題——平家物語諸本の待遇表現は一般に新しい本になる程増加する傾向があるが、特にそれは身分の高い人より低い人にめだつ様である。そこには身分本位の敬語から人物本位の敬語という様な動きが認められよう。

以下この問題につき考察を試みようとするが、ここでは話を単純にする為、用例を地文に限る。会話文と異なり、ここでは各本の編者たる検校やその背後の聴衆達から各人物に対する待遇度 \searrow が、一おう公平にうかがえるはずなのである。

〔2〕 覚一本の場合も、中古期文献や古い平家物語諸本等に比べれば、かなり敬語の多用化傾向が見られ、六代御前の如き無位無官の者にまで「(サ)セ給フ・オハシマス・マシマス・オボス・御覧ズ」などの高い敬語が用いられる

が、それでも新しい一方流諸本に比すれば用法のけじめがあり、身分官職に関する敬語という性格が著しい。

〔2.1〕例えば頼朝の場合も覚一本では、源二位頼朝卿（鎌倉殿）になると「思^{オホ}シメス・思^{オホ}ス・御覧ズ・遊バス」等の高い敬語を用いるが、兵衛佐時代はその様な例が皆無であるのみか「兵衛佐」と呼び捨てにする事が多い。しかし新しい一方流本では、左記⑴⑵の如くその差が漸次接近する。

⑴ 「兵衛佐」に対する敬語増加例

① 兵衛佐×（覚） ↓殿（葉時流正）〔上 363 11・1195 b〕〔上 364 4・1196 a〕〔上 365 10・1198 c〕〔上 365 13・1198 d〕

② 兵衛佐×（覚葉） ↓殿（時流）〔三日平氏・下 286 12〕

③ 兵衛佐×（覚葉流正） ↓殿（時）〔清水冠者・下 62 2・946 b〕

④ ありし（覚葉） ↓坐せし（時流正）〔三日平氏・下 286 7・1090 a〕

⑵ 「鎌倉殿」となって以後の高い敬語減少例

⑥ 御覧ずれば（覚葉） ↓見給へば（時流正）〔河原合戦・下 172 4・1002 a〕

〔2.11〕また藤原忠雅なども、花山院太政大臣ともなれば当然高い敬語が用いられるが、幼時は次の如く敬語を用いない。葉子本以下でその敬語が補われた（正節では復古的に敬語を削る）という次第である。

後れ奉て（覚） ↓給ひ（葉時流）・×（正）〔殿上闇討・86 14・92 d〕

〔2.2〕その他、身分の低い神主や僧、源氏の下級武士達も覚一本では殆んど敬語がないが、新しい本では漸次敬語が用いられる様になる。

〔2.21〕その端的な例として、文覚の敬語増加などは特に注意をひく。上西門院の衆遠藤武者盛遠の出家したものと、覚一本では敬語が少ないが、新しい本一特に時房本に至って激増状態を示す。左記①②は「六代」の章段にお

けるその例である。

① しほりける (覚葉) ↓ぬらされ (時流) |ぬらしける (正) [下 400 12・792 b]

② おほえけれ (覚葉) ↓思はれ (時流正) [下 400 13・792 b]

③ 見えざりけり (覚葉) ↓給はず (時流正) [下 401 15・794 b]

④ 見えず (覚葉) ↓給はず (時流正) [下 402 3・794 d]

〔2.3〕 同じ武士でも、源氏の敬語増加率は平氏のそれより遙かに著しいが、これもつまりは、覚一本において平氏に敬語が多用されている事を意味する。従って平氏でも、刑部卿どまりの忠盛等は覚一本での敬語が少い為、新しい本では源氏をしのぐ程の増加率を示す。勿論、彼の敬語増加には平家繁栄の基礎を築いた人という様な事も考え合わせられるが、その事自体は余り積極的に評価されなかったらしい。現にその敬語増加も、左記〔3.1〕項の如くせいぜい

「ル・ラル・給フ」の類であり、いわゆる高い敬語の増補は、諸本を通じて全く認められないのである。

〔3〕 身分本位の敬語から人物本位の敬語へという傾向は、覚一本〱葉子本〱時房本という様に漸次進んで行ったらしい。葉子本は覚一本に比し遙かにその傾向が著しいが、時房本や流布本には及ばない面があるのである。

〔3.1〕 例えば忠盛の場合を見ても、左記④の如く覚一本〱葉子本の敬語増加はいずれも国守以上の地位にある例であり、北面の下臈だった頃の例は、時房本に至りはじめて敬語が増補されるのである。

① 葉子本における敬語増加例

② 忠盛× (覚流正) ↓朝臣 (葉時) [殿上閣討・上 84 7・88 b]

③ 申しける (覚) ↓され (葉時流正) [同・上 87 9・94 b]

④ 申す (覚時正) |申されたり (葉流) [同・上 87 14・94 d]

- ④ 失せにき(覚) ↓給ひ(葉時流正) [鱸・上 89 3・25 c]
 (四) 時房本における敬語増加例

⑤ 供奉したり(覚葉) ↓せられ(時流) | 候はれ(正) [祇園女御・上 417 7・122 c]

⑥ うかがひけれ(覚葉) ↓思はれ(時流正) [同・上 418 9・124 c]

⑦ 申したり(覚葉) ↓され(時流正) [同・上 418 14・125 a]

⑧ もてなしけれ(覚葉) ↓され(時流正) [同・上 418 16・125 b]

[3.2] また覚一本、葉子本の敬語増加は、前記頼朝や清盛など身分の高い人の場合に多く、文覚など身分の低い人の敬語増加は大てい時房本以降に認められる様だが、これについても同様の事が言えそうである。左記⑥は葉子本において、清盛の敬語がより高められた例(鱸)の一部である。

⑨ 極め給へり(覚) ↓させ給(葉) | 至り(時流正) [上 90 6・27 d]

⑩ 握られし(覚) | 握り給ふ(葉時流正) [上 89 15・27 a]

五―一 敬語異同と人物批評

[1] 前述の如く一方流平家物語諸本の敬語は、一般に新しい本になるにつれて漸次増加傾向を示すが、中には増加の著しくない人物や逆に減少傾向のめだつ人もある。而してこれは、覚一本など、より古い一方流本の敬語使用との相対的關係としてとらえるべき面が多いが、しかしその背後には、何らかの意味での人物批評が窺えそうな気もする。

[2] さし当り左記⑨⑩など清盛の減少例などは、その可能性が大きそうである。現に彼の減少例は「禿・殿下乗合・入道逝去」等々、内容的に見ても批判意識の感じられそうな章段に多い。

- ㉑ 清盛公(覚流) ↓× (葉時正) [禿・上 90 9・556 b]
- ㉒ 御一家(覚葉流) ↓× (時正) [同・上 90 13・556 d]
- ㉓ 六波羅殿(覚流正) ↓× (葉時) [同・上 91 13・558 b]
- ㉔ 入道相国(覚) ↓× (葉時流正) [殿下乗合・上 118 13・382 c]
- ㉕ 入道殿(覚) ↓× (葉時流正) [同・上 118 14・382 d]
- ㉖ 御心地(覚葉) ↓× (時流正) [入道逝去・上 407 7・926 d]
- ㉗ 入れ給はず(覚葉) ↓られ (時流正) [同・上 407 9・927 a]
- ㉘ なり給ふ(覚葉) ↓なられける (時流正) [同・上 410 1・931 b]
- ㉙ 尽き給へば(覚葉) ↓ぬれ (時流正) [同・上 410 1・931 b]
- ㉚ 赴き給ひ(覚葉) ↓かれ (時流正) [同・上 410 6・931 d]

〔2.1〕なお重盛以下の平氏一門は、覚一本において身分不相応に敬語が多用される故、彼等に関する敬語減は余り気にならないが、前太政大臣清盛の場合は、覚一本の敬語使用が不充分であるだけに、その減少例については積極的な意味が感じられるのである。清盛の敬語の不充分さと言えば、身分から言っても実力から言っても並ぶ者なき清盛であるのに、覚一本における高い敬語の使用は、重盛以下の一族に比し遙かに少い。清盛に対する批判意識は、かなり早くからその敬語使用に反映したと言えよう。

〔3〕前記の如く、維盛・資盛・六代なども忠盛に比すればやはり増加が少い。むしろ下記〔3.1〕〔3.3〕項の如き減少傾向がめだつわけだが、これらは清盛の場合と異なり、それぞれ覚一本で過分の敬語が用いられている故、その行き過ぎに対する是正という感が深い。

〔3.1〕 尤も、左記④⑤など資盛や維盛の減少例については、或種の批判意識が想定されないわけでもない。

④ 資盛の敬語減少例

⑤ 資盛卿(覚正) ↓×(葉時流) 〔殿下乗合・上117 5・379 c〕 〔太宰府落・下132 5・685 b〕

⑥ 維盛の敬語減少例

⑦ 出でさせ給ひたりける(覚) ↓たたれ(葉時流正) 〔無文・上246 13・36 a〕

⑧ 思しめし返し(覚葉) ↓思ひ(時流正) 〔維盛入水・下281 7・530 a〕

⑨ 思ひ続けられ給へば(覚葉) ↓はれけれ(流正)・ひけれ(時) 〔同・下281 11・531 b〕

3.11 ⑩ 先ず資盛の例―その前者(「殿下乗合」の例)は、越前守だった資盛が摂政殿下藤原基房の行列に無礼を働き

恥辱を与えられる場面であり、また後者(「太宰府落」の例)は、豊後の緒方三郎の謀反に対し説得に出かけた資盛

(新三位中将)が、「どうせ大した事はできまい」と侮られて追いつ返される場面である。〔何れもその行動批判からし

て「卿」がとり外されたと考えられるのである。〕

一方、維盛については、平氏の嫡男であり乍ら一門と運命を共にしなかった為、評価が下落したという様な事も考

えられる。ただこの場合、右記④の例は別として、⑤⑥の例は、覚一本における高い敬語「サセ給フ・思シメス」の

類が、三位中将にはやや過分な様である。一おう行きすぎた敬語の是正と見なしたい。

3.12 ⑪ ともあれ平家の公達に関する敬語減少は、その様な消極的な意味しか持たない場合が多いかと思われる。そ

う言えば維盛の子六代においても、左記④⑤の如く高い敬語の減少例がめだつが、彼に関してはその殊勝な態度に対

する同情の念こそあれ、批判意識が生じたという様な事は、ちょっと想像できないのである。

⑫ 成らせ給ひ(覚葉流正) ↓り(時) 〔六代・下403 3・796 c〕

⑤ まします(覺葉) —おはす(時)・おはしけれ(流正)〔同・下 394 8・780 d〕

〔4〕 身分の低い人に敬語増加が著しいという事は、源氏の場合も同様である。源二位頼朝等よりも、身分の低い義経や頼政父子・範頼等の増加が著しいが、これもつまりは覚一本の敬語使用が少なかった事を意味する。更に渡辺党や佐々木高綱等の場合は、新しい本でもそれ程敬語が多いとは言えないが、覚一本の敬語が殆んどないだけに増加率は抜群となる。

〔5〕 頼朝については或程度前述したが、身分も高く政治的権力者でもある為、覚一本を含めて諸本とも敬語が多用される。特に覚一本で高い敬語が使用されるのは、源氏では彼一人という状態であるが、唯その高い敬語は左記④の如く、新しい本になるに従い減少傾向が著しい。その点、高い敬語の増加する義経と対照的であるが、敢えて頼朝嫌いとは言わぬまでも、義経等と異なり、人氣が下降気味だった事の反映と言えようか。

次は頼朝に関する高い敬語の減少例である。④⑤の例は葉子本以下諸本にその詞章がない為、具体的な比較はできないが、或意味ではやはり高い敬語の減少例と見なし得る。

① 御覽ずれば(覺葉) —見給へば(時流正)〔河原合戦・下 172 4・1002 a〕

② 〓と遊ばして御判あり(覺時流正) ↓×(葉)〔六代・下 405 12・801 d〕

③ 大仏殿へ参らせ給ひ(覺)〔六代被斬・下 417 7〕

④ 都へ入らせ給ひ(覺)〔同・下 417 7〕

〔5.1〕 頼朝の人氣と言えば、彼の場合是一般的な敬語(高い敬語でなく)の増加現象も、概ね葉子本・時房本あたりで止まってしまう傾向にあり、各本にわたって増加のめだつ義経とは異なる。尤も、彼は幕府の創始者という様な意味もあってか、積極的な批判は憚られたらしく、一般的敬語の減少はめだたないのである。

〔6〕 義経は前述の如く敬語増加が著しい。特に左記の例①②の如き高い敬語の増補は頼朝と対照的であって注目をひく。判官びいきという積極的な人気上昇を反映するのだろう。戦に強く人情にもろいという大衆好みの英雄であり、その最期も同情のまよになったわけである。

さし当り③の例の「聞シメス」等は、諸本を通じ極ね皇族や摂政を原則とする最高敬語である点興味深い。なお④の例の「マシマス」は、一おう義経と範頼の両人を主語とするが、敬意の中心はあくまで義経だろう。範頼に対する高い敬語の増補は、この例以外全く見られないのである。

義経に対する高い敬語の増補例

- ① 聞き給ひ (覚葉) ーきこしめして (時流正) 〔土佐坊被斬・下 386 3・79 d〕
② おはしける (覚時正) ーましまし (葉流) 〔法住寺合戦・下 161 4・994 d〕
③ とり上げ× (覚葉) ーさせ給ひて (時流正) 〔老馬・下 199 8・275 b〕

〔6.1〕 所で彼の敬語増加は一般に、その本領たる戦斗場面に著しく、上洛まで―鈴木則郎氏 (『文芸研究』56) のいわゆる第一段―の部分はそれが少い。しかしこの部分は概ね頼朝の代官としての記録的な文であり、描写も全体的に簡略である。批判とか何とか言う様な事を考える必要はない。

〔6.2〕 更に立ち入って彼の敬語増加は、鈴木氏のいわゆる第二段 (戦斗場面) のみならず、第三段 (戦後) でも著しい。右記高い敬語の例④の「キコシメス」は巻十二であるし、その他、巻十一「内侍所都入」や巻十二「判官都落」など敬語増の著しい章段が、第三段にもしばしば認められるのである。第二段がその勇ましさ積極性を評価されたのに対し、第三段の場合は、敵にも情をかける人がらやその悲運が同情をひいたものと言えよう。

一次は「河原合戦」 (右記第二段) 及び「判官都落」 (第三段) における義経の敬語増加例である。

- ① 申しける (覚葉) ↓され (時流正) 〔河原合戦・下 174 14・1006 c〕
- ② 九郎義経 (覚葉) | 大將軍九郎御曹子 (時流正) 〔同・下 173 16・1004 d〕
- ③ 申しけれ (覚) ↓されたり (時流) | 言ひ入れられたり (正) 〔同・下 174 2・1005 b〕
- ④ 義経 (覚) | 御曹子 (葉時流正) 〔同・下 173 9・1004 a〕
- ⑤ 奏聞しける (覚葉) ↓せられ (時流正) 〔判官都落・下 390 10・370 d〕
- ⑥ 喜んで (覚葉) | 喜ばれける (時流正) 〔同・下 391 8・373 a〕
- ⑦ 具したり (覚葉) ↓せられ (時流正) 〔同・下 391 12・373 c〕
- ⑧ 捨ておきたり (覚葉) ↓かれ (時流正) 〔同・下 391 12・373 c〕
- ⑨ 一方、頼政の場合も敬語増加が著しく、特に敬語減少例が少い点など注意をひく。頼朝等に比べて覚一本の敬語が少なかったという事の他、文武両道に秀でた老雄としての評価等も或程度うかがえようか。ただしそれはあくまで消極的な評価であり、義経の如き積極的な人気はなかったらしい。現に、義経と異なり高い敬語の増補は諸本を通じ全く見られないのである。従三位という頼政の身分が義経より遙かに高い事は言をまつまい。
- 〔7.1〕 なお右記高い敬語が無い事については、「我身三位して…さてもおはしぬべき人の由なき謀反おこして官をも失ひ参らせ我身も子孫も亡びぬるこそうたてけれ」(覚上 328) という様な批判等も考え合わせられそうだが、ともあれ本稿では、高い敬語の無い事を、積極的な人気がなかっただけの話と考えたい。一般的な敬語減少がめだたない事など思い合わすべきだろう。
- 左記④⑥は時房本における頼政の敬語増加例である。
- ⑩ 候ひける (覚葉) ↓はれ (時流正) 〔源氏掬・上 279 6・1263 c〕

⑤ 申しける(覺葉) ↓ され(時流正) 〔同・上 279 7・1263 c〕 〔鶴・上 325 9・110 b〕

〔8〕 源氏の中では義仲も敬語増加の少い人物と言えるが、それは前記頼朝の如き高位安定でもなく、また詞章異同自体の少い傍流人物とも異なる。増加・減少ともに著しく、毀誉褒貶の落差の著しかった人物像をうかがわせるものがある。

〔8.1〕 章段により彼の待遇差が甚しいという事は、従来から説かれた如く覚一本でも既に認められる所だが、その傾向は新しい本においてますます著しくなる。

〔8.2〕 即ちその敬語増は、当然の事ながら「木曾願書・俱利伽羅落・篠原合戦・実盛最期」の如き合戦場面や木曾最期」等にめだつ。特に破竹の勢の「俱利伽羅落・篠原合戦・実盛最期」等の章段は覚一本でも敬語形が多いが、更にはその非敬語形も、新しい本では左記①②の如く殆んど敬語形となる。とりわけ①の例の如き高い敬語の増補は、かかる合戦物以外の章段では全く認められないのである。

① する(覺葉時正) ↓ 給ひける(流) 〔俱利伽羅落・下 75 1・955 a〕

② 追入れたり(覺葉) ↓ 下る(時正) ・ られたり(流) 〔同・下 75 2・955 b〕

③ 渡しけり(覺葉) ↓ 渡す(時) ・ 渡いて見給へば(流正) 〔同・下 75 3・955 c〕

④ 木曾×(覺葉時) ↓ 殿(流正) 〔篠原合戦・下 77 2・762 d〕

⑤ ときを作る(覺葉時) ↓ り給ふ(正) ↓ 向はれける(流) 〔同・下 77 2・762 d〕

⑥ 見給へば(覺葉時正) ↓ 御覽ずれば(流) 〔実盛最期・下 81 4・424 b〕

〔8.21〕 また「木曾最期」の章段も左記①②の如き敬語増加が著しいが、落ちめの朝敵の身という様な関係から

か、右記「俱利伽羅落」等諸章段(〔8.2〕項)と異なり、覚一本での非敬語形がめだつ。次の敬語増加例も「俱利伽

羅落」等の場合と異なり、同情票的な面が強いのだろう。

㉑ 落行く(覚葉) ↓き給ふ(時流正) [木曾最期・下176 14・436 d]

㉒ 進みけれ(覚) |進んだる(葉) |進み給ふ(時流正) [同・下177 16・438 d]

㉓ 木曾×(覚葉) ↓殿(時流正) [同・下177 12・438 b]

㉔ 木曾×(覚) ↓殿(葉時流正) [同・下180 9・444 a]

〔8.3〕これに対し、その武骨さを卑しめられる「猫間」や、「鼓判官」あたり以下、都で狼藉に及び朝敵の身となり行く章段では、右記「木曾最期」の例を除き殆んど増加が認められない。これらの章段では覚一本でも大てい非敬語形をとるわけだが、或程度存していた敬語形も新しい本では、左記㉑㉒の如く削除されてしまうのである。

㉕ 宣ひける(覚) ↓言ひ(葉時流正) [猫間・下140 2・520 c]

㉖ 木曾殿(覚) ↓×(時流正) [室山合戦・下149 6・608 b]

なお敬語形の稀な章段の中、「室山合戦」の場合は現存諸本では「鼓判官」の章段より前におかれるが、時期的には「法住寺合戦」より後の事実(『玉葉』寿永二年十二月二日等)である故、「法住寺合戦」に準ずる待遇表現になったものと言えよう。また行家との仲違いや平氏に敗れた戦である事なども、或程度関係するののか。

〔8.31〕同じく敬語形の稀な章段でも、「燧合戦(巻七)」あたり以前の部分は、いわゆる記録的な面が多く、全般に記述も簡単である故、余り積極的な意味を考える必要はなさそうである。ただ「北国下向」などの場合は、「頼朝と不和の由」という事が関係するのかもしれない。

六、おわりに―問題点

〔1〕 以上、一方流平家物語諸本の敬語異同に關し、△身分の敬語から人物本位の敬語へ▽という観点を中心に考察を試みたが、問題は必ずしも簡単ではない。さし当り△人物▽というものについても、政治的実力（身分とは別）の類と大衆的な評価とが異質である事など言をまつまい。そこでは人がらとかその人の運命など人氣の要因となる様なものを子細に分析して行かねばならない。

〔2〕 更には△同じ人物でも場面によって待遇度が異なる▽という問題に關しては、左記⑴⑵の如くいろんな観点から分析する必要がある。

⑴ 個別的な行動批判 ⑵ その記述に關連すべき他の人物との相対的關係 ⑶ 話の流れにおける中心的人物か否か ⑷ それに關連して単なる記録的な文章か否か ⑸ 純粹な文體論的観点等々。

右記⑴や⑵の面については、義仲の敬語に關連して或程度述べた事があるし、⑶に關係する考え方もしばしば示してきた。―例えば頼政に高い敬語がない事など。

なお⑵の問題は、原則として地の文では余り考慮する必要がないはずのだが、實際問題としては、近くにいる人等との相対的關係がしばしば影響しそうである。例えば義仲の敬語が合戦場面で高いのは、戦斗が彼の本領である為とも言えるが、また戦場では彼が大將軍であるという様な事も考え合わされる。これに對し、都に入ると、皇族や公卿等周囲の人は殆んど彼より上位者となるわけである。そう言えば左記「木曾願書」における義仲の待遇度を見ても、⑶⑷など目下の者に対する時は概ね敬語形をとるが、⑸の神仙に対する時は非敬語形になっている。

① (覚明が) 木曾殿の御前に畏って〔下70 2・1147 b〕

② 木曾殿国の案内者を召して〔下69 9・1146 d〕

③ (家来達に) 宣ひける〔下68 8・1145 b〕

④ 大菩薩の御宝殿にこそ納めけれ〔下71 14・1150 d〕

(例)の面について言えば、左記④⑤の例は義仲から巴に対する会話の中で、世間の人々の言葉を予想して引用したもののだが、覚一本等は直接話法的文体・正節等は間接話法的文体をとったものと考えられる。また⑥の例は今井四郎から義仲への会話だが、葉子本以下諸本の場合は、その敬語をすぐ下の文「討たれさせ給ひ(正節は「頭取ら」れさせ給ひ)」に含ませたのと同じなされるのである。

② 木曾殿(覚) — 木曾(葉)・義仲(時流正)〔木曾最期・下179 1・440 c〕

⑥ 具せられ(覚葉) — 具し(時流正)〔同右〕

⑦ 組み落されさせ給ひて(覚) ↓て(葉時流正)〔同・下180 7・443 d〕

〔3〕 しかしそれらの詳細は、詞章異同と音楽性との関係や、諸本の性格との関係等についての問題と共に、今後の課題としたい。

筆者は「平曲譜本の研究」に関して、昭和49～52年度文部省より科学研究費助成金(一般研究)をうけたが、本稿の内容はそれに負う所が大きい。